

2021.3.20

No.223

編集・発行人 樋口みな子

E-mail
minginga@agate.plala.or.jp
URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>
郵便振替「銀河通信」
02740-7-56535
(郵送年間2,000円)



映画「標的」上映と植村裁判報告会を4月10日に

3月になっても大雪が続き、春がこんなに待ち遠しかった年はありません。我が家の積雪は窓の3分の1にまで迫りました。ようやく3月10日ごろから陽射しが強くなり一気に雪解けが進み、野幌森林公園のキタコブシが芽吹き始めました。



3月12日 野幌森林公園林木育種場近くの丘から見た札幌の山々。

左から順に神威岳、鳥帽子岳、百松沢山

植村裁判のうち、櫻井よしこ氏らを訴えた札幌訴訟の上告が最高裁で昨年11月、西岡力氏らを訴えた東京訴訟の上告が最高裁でこの3月11日に棄却しました。ここまで、歴史修正主義が社会に浸透しているのか？と驚きと失望を禁じ得ません。

みなさまの長い間の支援ありがとうございます。

この間、植村隆さんの闘いを追ったドキュメンタリー映画「標的」が完成し、裁判最終報告と合わせて上映することになりました。是非ご参加ください。

植村さんのバッシングから提訴、最高裁上告棄却まで、なぜ、何と、どのように、闘ってきたのか、そしてこれからは？を考えたいと思います。

映画「標的」上映と植村裁判報告会

日時：4月10日(土)13:30~16:00(開場13:00)

会場：北海道自治労会館 5階ホール(札幌市北区北6西7)

参加費：1000円(予約不要)

プログラム

1部 「標的」上映

2部 植村裁判最終報告 札幌訴訟弁護団、植村隆さん、西嶋真司監督

主催/問合せ：植村裁判を支える市民の会
uemurasasaeru@gmail.com

090-9755-6292(山本)

マスク着用、手指の消毒、検温をお願いします。

「うめしゅんの世界花探訪」刊行記念写真展
「青いケシ」に魅せられ

「うめしゅんの世界花探訪」を前号で紹介しました。刊行を記念し、同書に納められた希少な花々の写真パネルの展示会が開催されます。

日時：4月2日(金)~6日10:00~17:30 初日は13:00開場、最終日は15:00 終了

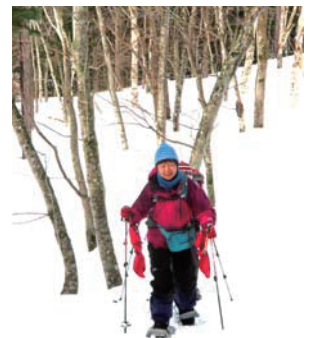
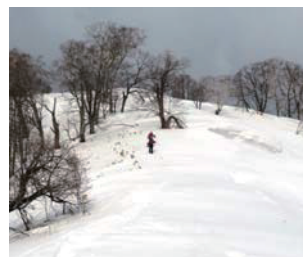
会場：北海道新聞社1階 道新プラザDO-BOX
(札幌市中央区大通西3)

入場：無料

主催：北海道新聞社事業局出版センター

問い合わせは北海道新聞社出版センターへ
011-210-5744(平日9:30~17:30)

春一番、ふくろう山
に登る



3月10日、当別町のふくろう山に登りました。今年初登山で5か月ぶりでした。

当別ダム管理棟から、100m以上下流の緩い斜面からスノーシューで取り付きます。暖気が入って時々ずぶっと埋まるので気をつけて進みました。メンバーは3人。標高は291mと低いですが、アップダウンは結構きつかったです。でも明るい森で、当別ダム周辺の山が水墨画のようでした。頂上付近は視界はいいですが風が唸っていました。当別ダム駐車 出発10:20 ふくろう山頂上11:40 昼食後下山。登山口12:55 14時前に帰宅しました。友人と近況を語りあい、久しぶりに気持ちのいい汗をかき、山から元気をもらいました。

誰にとっての「10年」なのか

菅野隆子（福島県より原発自主避難）



かふえ・ごはん・えぞり
す亭で 菅野隆子さん
(撮影・及川文さん)

大きな事件や事故を振り返るのは1、3、5、10年目と以前報道の方から伺っていた。今年は3.11東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故から10年になる。コロナ禍の中とはいえ、大災害でもおきないかぎり大々的に特番が組まれることになるだろう。

私のところにもテレビ局や新聞社、ラジオ局から取材が

すでに入っている。

「〇年経って、今の心境は？」と、これまでに何度質問されたただろう。そのたびに私は内心首をひねっていた。たぶん、ほとんどの被災者、避難者にとって「〇年」は特別な意味を持たない。

もちろん、それだけの年月が経ったのだという重みがないわけではない。まして10年となれば、ほとんどの避難者は仕事を見つけ、新しい居住地で生活をしている。小さかった子どもたちもほとんどが小学校高学年以上、大学生や成人して働いている子もたくさんいる。

「避難者」という不安定な状態から個人差はあれど「移住者」としてこの地で生活をする事ができている。誰もが必死で駆け抜けた10年だったことには間違いない、のだけれど…。

2月13日、福島県沖最大震度6強の地震で、私はいまだあの災害から全く自由になっていないことを思い知らされた。テレビでアナウンサーが地震を伝えるのと同時くらいに札幌にもわずかな揺れ、福島県沖震度6強の表示にさっと血の気が引いた。友人知人の安否確認はもちろん、津波は？原発は？焼けつくような気持ちで情報を収集していくなかで、知らず臨戦態勢に身体がシフトしていたのだろう。家屋の被害は大きそうだが、津波の被害はない、原子力発電所も早急な対応が必要な状態ではないと確認したあと、私の体にはいくつもの発疹が出た。その翌日は体中の痛みと片頭痛。仕事は何とかこなせたが、自分が想っている以上に負荷がかかっていたようだ。

そう。何にも終わってない。何にも変わってない。あの時の不安も恐怖も怒りも悲しみも、全部私の中に残っている。いつまた大きな災害が来るかもしれない。原発が壊滅的な状態になるかもしれない。その緊張感を私だけでなく多くの避難者被災者が、いつもどこか心の片隅に置いたままなのだ。きっとそれは20年後でも30年後でも変わらないと思う。

今回、この10年間ことあるごとに私を追いかけてきてくれた記者(ディレクター)さんが二人、取材に来てくれている。その方たちを信頼している。

区切りを欲しているのは、私たちではなく「報道」なのだろう。様々な事件や事故があふれかえるなか、それでも過去の大事なニュースを取り上げるために区切りを利用する。忘れないため。思い出すため、未来に

つなげるために。当事者が忘れることは無いとしても、世間は忘れていくものだから。

原発事故がいかにも理不尽で暗い影を人生に落とすのか、私を通して伝えることができるのだとしたらそれはありがたいし意味あることなのだと思う。何も終わってないってことも含めて、少しでも多くの方が災害やエネルギーのことについて考えてくれるきっかけになればうれしいとも思う。

声を上げる人がいなければ、事実は見えてこないし、伝えてくれる人がいなければ、それを知らしめることはできない。

原発事故の問題は長期戦だ。しかも、地震の多いこの国にはいまだたくさんの原子炉があり、核関連施設がある。核ごみの問題もある。

ところで、今回の地震で廃炉作業中の原子炉格納容器の水量が低下し、容器内の気圧は大気中と同じになったというニュースが入ってきた。福島県新地町沖でとれた黒ソー検体から500bq(ベクレル)/kgのセシウムが検出されてもいる。(国基準は100bq/kg)

あれ？これって、現在進行形の危機なのだけれど…いいのかな、私のことなんか取材していて。

とまれ、たくさんの方がこの「10年」をきっかけに自分事として考えてくれることを願ってやまない。

”核のゴミ”

なぜいま「地層処分」？

小野有五（北海道大学名誉教授・自然地理学）



2020年8月、寿都町長は、突然、「核のゴミ」の「地層処分」の候補地に手を挙げたいと発表、大騒ぎになりました。9月には、近隣の神恵内村でも、「地層処分」のための文献調査受け入れの動きが出ました。ど

泊の地形を説明する小野有五さん（撮影・minako）

ちらも、地元住民には全く知らせず、町長や商工会上層部だけがNUMOと密かに会い、話を進めていたのです。寿都町では町長の独断で、2ヶ月で「文献調査」に応募、神恵内村では、わずか1ヶ月で、「核のゴミ」の「文献調査」を受け入れてしまったのです。なぜ住民にも隠して秘密裡にことを進めるのか、なぜそんなに急ぐのか、なぜ「文献調査」だけで20億円ものお金が国から出るのか。常識では考えられないことばかりです。

「地層処分」を行うNUMOとは？

NUMOとはNuclear Waste Management Organizationの略称ですが、おかしいと思いませんか？NUMOという略称からは、Waste(廃棄物)という、最も大事な言葉がすっぽり抜け落ちていきます。日本語の「原子力発電環境整備機構」でも、肝心の「核廃棄物」という言葉は隠されていますね。ここにも、最初から人々を欺こうとする意図が

現れていると言えるのではないのでしょうか。

第二の隠蔽は、NUMOのやろうとしている事業が、「高レベル放射性廃棄物」の「地層処分」だと公言されていることです。一緒に埋められてしまうTRU(低レベル放射性廃棄物)のほうが、人間や環境にとってはもっと危険かもしれないのに、「地層処分」=「高レベル放射性廃棄物」の処分事業とすることで、住民説明会でも、危険なTRUのことは一切、説明されないしくみになっているのです。TRUがなぜ危険かと言えば、ヨウ素129などは地下水にきわめて溶けやすく、地下に埋設後、わずか十数年後には地表にまで出てくることわかっているからです。日本よりはずっと地質的な条件のよいはずのドイツでも、埋設後、十数年後に放射性物質が漏れ出し、いまだに回収もできない状態が続いています。しかしマスコミも、NUMOの戦略に乗せられて、「高レベル放射性廃棄物」のことしか言いません。

第三は、そもそもNUMOという組織の素性の隠蔽です。多くの人は、NUMOとは、原発を扱う経産省エネルギー庁の「核のゴミ」を担当する部署だろうと思っているでしょう。しかし、NUMOとは、原発をもつ電力会社が100%出資して、原発で出したゴミの処分のために自前でつくった組織なのです。電力会社はあくまで民間会社、自社の利益を最優先するのは当たり前です。NUMOの任務は、厄介な「核のゴミ」を早く原発の外に出し、無関係なものにしてしまおうという電力会社の身勝手な目的遂行だけにあるのです。

なぜ「地層処分」を急ぐのか？

地層処分では、「核のゴミ」を原発の敷地外に持ち出し、どこかに埋め、トンネルは埋め戻して、人間からは完全に遮断しようします。もちろん、総延長が200kmにもなるトンネルは、地上とつながっており、いくら埋め戻しても、どこからか地下水が入り、完全に遮断できる保証はありませんが、その事業を遂行するのがNUMOです。けれどもNUMOは、「核のゴミ」を地下に埋める作業が終われば、そこで解散してしまうのです。後になって、危険な放射性物質が漏れてきたとしても、もうそのときにNUMOは存在しません。誰も責任をとらなくてもいい仕組みに最初からなっているのです。これほど無責任なことがあるのでしょうか？

電力会社が「地層処分」を急いでいるのは、原発から取り出した高温の使用済み核燃料棒を冷やすプールが、もう満杯になりかけているからです。本来なら、プールが一杯なら、増設すればすむことですし、さらに、温度が下がったらプールから取り出し、キャスクと呼ばれるじょうぶな鋼鉄のタンクに入れて、外に放射能が漏れないようにして保管することができます。これを乾式貯蔵と言いますが、その技術はすでに確立され、一部では実施されてもいるのです。ですから、原発内でそれをやれば、いいことです。

一方、地下に埋めてしまう「地層処分」では、TRUはすぐにも溶け出し、「ガラス固化体」も、地下水には漏れ出すことがわかっています。漏れだす速さを、粘土で遅くすることしか今の技術ではできないのです。10万年、漏れないように保管する技術など、人類はまだもっていないのです。それでも電力会社が「地層処分」を急ぐのは、敷地内で保管すれば、お金がかかる

からに他なりません。埋めてしまえば、あとは知らん顔できる、というのは、原発を推進する国も同様です。だから20億円など、安いものなのです。

ほかにやり方はないのか？

では、どうしたらいいのでしょうか。

200年たつと、放射能の強さは、原子炉から取り出した直後の十万分の1にまで減少することがわかっています。200年たったなら、人間の技術も、もっと進歩するでしょう。地層処分で問題となる活断層についても、もっとわかるようになるでしょう。放射能も弱くなったその時点で、今よりは進んだ技術で地層処分するかどうか決めればいいのです。

少なくともそれまで200年は、すでに技術的に確立している乾式貯蔵で、つねに監視しながら、安全に保管することが、もっとも責任ある態度なのです。それは決して無責任な「先送り」ではありません。地上で管理できる技術がありながら、漏れ出ることがわかっているながら埋めてしまうことこそ、無責任なのです。いちど出した「核のゴミ」が消えることはありません。コロナで学んだように、人類は、それを常に監視しながら、生きていくべきなのではないかと思うのです。(婦人の友3月号から抜粋)

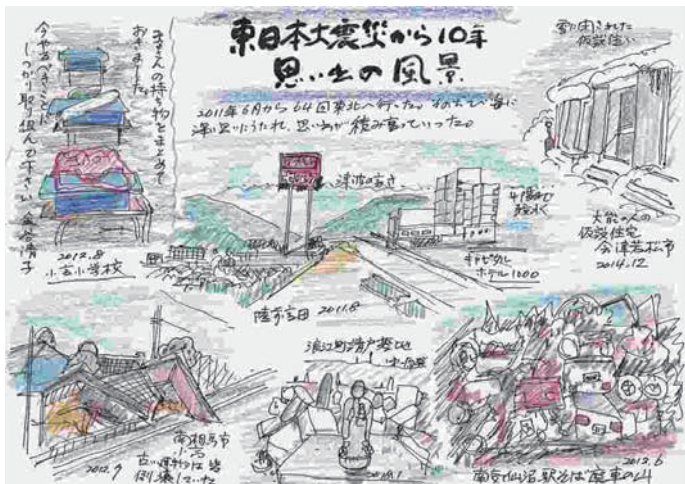
東日本大震災から10年 思い出の風景

堀泰雄(エスペラント作家)

東日本大震災から10年が経った。被災地を何回訪問したか数えてみると64回だった。青森から茨城まで、震災の被災地をほとんど巡り歩いた。なぜそんなに巡ったのか、理由は、二つだろう。一つは震災前から続けていた、エスペラントによる日本の報告、Raportoj el Japanioの著者として世界に震災を広く訴えたかったことがある。特に原発事故は、世界的な問題、あるいは地球の未来にも関わるような大問題なので、福島現状を世界に知らせ反核の運動に貢献したかったことがある。

2つ目には、釜石市唐丹(とうに)の子ども支援に9年間もかかわったことがある。支援運動のために唐丹には年に3回は(卒業式、体育祭、文化祭)訪問することになり、その折に周辺をめぐることになった。だんだん地元の人との交流も増え、その人たちに会いに行く旅、というような様相も加わった。一つのところへ行くと、別のところはどうか、また前に行ったところは今どうなっているのか、などの興味がわき、ジパング倶楽部の乗り放題切符も便利に使ってゆくことになった。

この間の思い出の風景は無数にあって、一枚の紙にはまとめきれないが、あえてまとめてみた。スケッチ=次ページ=の中央は、陸前高田の2011年8月末の風景である。右側には7階建てのキャピタルホテル1000が立っていたが、4階まで浸水して、後に取り壊された。国道6号線の真ん中に、ガソリンスタンドの看板だけが残っていて、その看板に傷が出来ていた。この高さまで浸水したということである。左に、高田高校が見える。そのあたりが町の中心であったが、コンクリートの建物を残して



すべて流失した。

右下は、南気仙沼駅のすぐわきで、ここには繁華街があったらしいがすべてなくなりホームと4階建ての雑居ビルが残っていた。そのわきに、つぶれた車の山があった。すべてがしわくちやで、この中で亡くなった方もいるのだらうと思うと荘厳な気持ちになった。

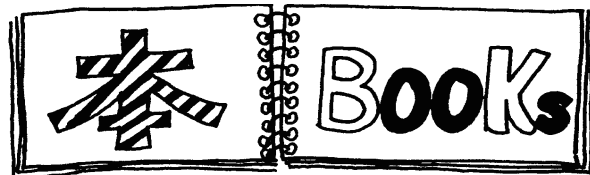
左上、左下は、南相馬市小高区である。福島は地震の被害も大きく、ここ小高では、古い木造建築はほとんど倒壊したり一階がつぶれたりしていた。駅までまっすぐだった道も湾曲してしまった。小高は、事故を起こした福島第一原発から20キロ圏内にあったため警戒区域になり、避難指示が出され一時期入ることもできなくなった。小高小学校には、震災1年後に、一時的に入ることが出来るようになったようで、小高小学校の先生たちは、自分の担任の教室の残された持ち物を整理した。私が行ったのはその半年後くらいだったので、生徒の中には戻ってきて自分の持ち物をもって帰った子どももいたようだが、数人の持ち物はそのままになっていた。その後、開校まで毎年見に行ったが、残った持ち物はほとんどそのまま、やがて開校とともにどこかに保管されたか、捨てられたかした。黒板には先生の言葉が残され、戻ってきた子どもの言葉も残っていた。涙なくしては読むことができなかった。

中央下は、浪江町請戸の墓地である。請戸は、小学校以外に建物も残らないほど壊滅した。墓地では墓石はひっくり返って、骨壺を入れた石室はむき出しになっていた。荒涼とした風景である。墓地の向こうには、福島第一原発の鉄塔などが見える。もし原発事故がなかったら、岩手、宮城の被災地同様、かさ上げが行われてそれなりの復興の姿は見せていたはずだが、この10年間、ほとんど何も行われていない。多分、この墓地も今もそのままだろう。

右上は、会津若松の仮設住宅で、ここには第一原発が立っていた大熊町の役場も引っ越し、住民の仮設住宅もできた。多くの住民が原発の仕事についていたため、人口の半分は会津に、半分はいわきに、ということになった。福島県の太平洋岸は、雪もめったに降らない温暖なところだけに、こんな雪深い会津のしかも仮設住宅に住む気持ちはどんなにつらいだろうかと、心が痛んだ。今は仮設もないのではないかと思うが、大熊は依然として居住制限地域なので、故郷には戻っていないはずだ。どこかに新しく家でも建てたか、借りて、漂流生活を続けているのではないだろうか。

10年一区切りという。確かに、外観はきれいになり、初めてそこを訪れた人は、きれいな街だなと思うかもしれない。しかし、家族を失い家を失った人の心の傷はいえることはない。福島の被災者は、故郷にも帰れな

い。国は、また福島県でさえも、「もう終わり」と言わんばかりに切り捨て、棄民政策を推進している。私の旅もほぼ終わった。これから、被災した人たちにどう関わって行くのか、果たしてそれが出来るのか。こっちはもう今年には80歳になり、人の事を考えるより自分の身を案じなければならない年齢になった。そんな中、群馬県に避難してきた福島県人の原発賠償裁判の支援、それと会津に事務所がある「子ども脱被ばく裁判」の支援とをできる限る続けて行くつもりだ。 2021年3月12日



読者のお二人から本の紹介のご寄稿がありました。書店にはありませんので申し込みをお待ちしています。

尹東柱(ユン・ドンジュ)
パンフレットの紹介を



詩人尹東柱の想いを つなぐ
記憶と和解の碑

発行・詩人尹東柱記念碑建立
委員会 1,000円+送料300円

さる2月13日北大南門近くにある
聖公会札幌キリスト教会で「尹東

柱(ユン・ドンジュ)を語る会」が開催されました。毎年開かれ今年5回目とのこと。尹東柱は韓国の大学入試に最も多く出される詩人で韓国の青年で知らない人はいないとの事です。1942年立教大学に留学。1943年同志社大学在学中に、朝鮮独立運動への関与を理由に逮捕され45年2月16日日本の敗戦半年前に福岡刑務所で獄死しました。彼の命日2月16日に近い土曜日に開催されています。

尹東柱が日本の官憲に捕まる前、43年初夏、宇治川のほとりにハイキングに出かけ日本の友人たちと一緒に撮った生前最後の写真があります。同志社大学在学中は創氏改名で日本名を名乗っていたため、友人達も本名を知らず元NHKディレクター多胡吉郎氏が発見するまで写真を持っていた友人も彼の逮捕と死を知りませんでした。

遺族も知らなかった日本の友人との生前最後の写真を記念し日韓交流の証として、2017年宇治川のほとりに、日本人有志の手によって「詩人尹東柱記憶と和解の碑」が建立されました。この記念碑を作る運動は、私が北大時代、北大平和委員会でお世話になった先輩の夫人紺谷延子さんが中心になったもので、紺谷延子さんは道朝鮮学校に昨年まで45回毎年お米を届けている山本玉樹先生の妹さんです。

私は一昨年京都で行われた「核戦争に反対する医師・医学者のつどい」オプションルツアーで、その碑の前で紺谷延子さんの話を聞いてきました。

碑が出来るまでの運動の記録「詩人尹東柱の想いを つなぐ 記憶と和解の碑」で、韓国テレビ局

と合同でドキュメンタリー番組を作った元NHKの多胡吉郎氏の寄稿や、尹東柱の詩が載っています。韓国のテレビでこの碑のことが紹介されてから、この碑を訪れる韓国の青年たちが何人もいるとの事です。

この記念碑は、戦前「治安維持法」に反対し右翼に虐殺された山本宣治の実家「花やしき」の近くにあります。私は一昨年京都で行われた「全国反核医師のつどい」のツアーで尹東柱の碑に行く前に「花やしき」で食事し、山本宣治の記念館にも行ってきました。宣治も尹東柱も敬虔なクリスチャンでした。

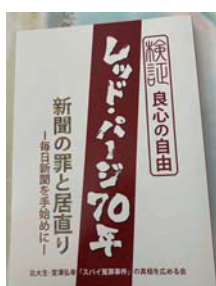
宣治の遺品の中に在京都朝鮮留学生学友会誌「学潮」創刊号があり、宣治は朝鮮人留学生を励ます文を載せています。記念館(小さな建物ですが)には、山本宣治の葬儀の様子を描いた小樽出身で小林多喜二の友人、大月源二の大きな絵が無造作に置いてありました。(ちょっと心が痛みました)

山本玉樹先生がいつも言っていますが、私たちは戦前・戦中の他国民に対する加害行為を学ぶことも必要ですが、その中で少数ではありますが、虐げられた人々に心を寄せ命をかけて戦争に反対した日本の先達たちの事を知ること、そこから学ぶことの大切さを思っています。

尹東柱の詩はハンゲルで書かれています、戦前ハンゲルで文章を書くことも「朝鮮独立運動」にくみするとして犯罪とみなされました。(福原正和)

パンフ希望の方は樋口みな子に住所、氏名をお知らせください。送料込みで1300円。振込用紙を同封します。福原さんから代金は「銀河通信」カンパにとのこと。銀河通信発行代にさせていただきます。

国家権力による弾圧を許さない



検証 良心の自由 レッド・ページ70年 新聞の罪と居直り—毎日新聞を手始めに—

北大生・宮澤弘幸「スパイ冤罪事件」の真相を広める会

2013年1月に札幌で結成した「北大生・宮澤弘幸『スパイ冤罪事件』の真相を広める会」は、「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」の真相を糾す活動を通じて、国家権力が国民を弾圧し、いかに残酷であるかを明らかにしました。さらに視野を広げて治安維持法体制下で、弾圧事件が数多くあることを知り、「国家権力犯罪に“時効”はない」との立場に立つべきと考え、2019年に同名の冊子を発行しました。

この冊子作成の調査・編集過程で、戦後最大の人権侵害として、弾圧被害者の名誉回復と国家賠償を要求している「レッド・ページ反対全国連絡センター」と出会いました。ところがその運動は新聞・通信・放送労働者に対するレッド・ページについては何も触れていないのです。そこで「真相を広める会」元幹事で私を含む毎日新聞労組OBの4人が毎日新聞を中心に新聞各社のレッド・ページについて調査した結果をまとめたのが本書です。

1950年7月29日の毎日新聞1面と朝日新聞2面に「報道界から“赤”追放」と見出しを付けた小さな記事が掲載

されました。「朝日、毎日、読売、日経、東京各新聞社、日本放送協会、時事通信社、共同通信社は最近数次にわたるマッカーサー元帥から吉田首相に送られた共産分子の活動に関する書簡の趣旨に従い、(7月)28日午後、それぞれ各社内の共産党員とこれに同調する分子の解雇を申し渡した。現在判明している全国における解雇数は次のとおり。朝日72、毎日49、読売34、日経20、東京8、放送協会99、時事通信16、共同通信33」(新聞・通信・放送各社の解雇はその後も続き、日本新聞協会調べでは49社701人と言う記録が残されている)

解雇された労働者たちは、東京では「言論弾圧反対同盟」を結成して果敢に闘いました。しかし最終的には、勝利、和解、依願退社などで終結したと記録されています。

当時の日本は連合国占領下でGHQの支配下にありました。しかし現在に続く平和憲法が制定公布され、良心の自由が保障されていたのです。それにも関わらず真つ先に新聞・通信・放送分野でレッド・ページが強行され、この弾圧に対する抵抗がなぜ起きなかったのか。その結果が「日米安保条約に基づく日米地位協定」によって、アメリカの事実上の占領下にある現実につながっていると考えざるを得ません。本書はまだ残部があります。ご希望の方は、千代田区労協・水久保文明まで。送料込2000円。FAX:03-6272-5263,e-mail:chyda-kr@dio.n.ne.jp/まで。

(福島 清=「真相を広める会」事務局)

博愛的な優しさを貫いた女性



評伝 九津見房子～凛として生きて

堀和恵著 郁朋社 1,650円

堀さんはこの著書の前に「評伝 菅野須賀子」を書いています。菅野と九津見房子は新宿のある一角で暮らしていたことがあると言う。九津見はどんな人生を送ったのだろうか？冒頭から興味がわきます。

堀さんは神楽坂の「喫茶トンボロ」を訪ねます。九津見房子の孫に会うためでした。房子は長くここに暮らし孫たちも暮らしたことがあると言う。導入から引き込まれました。

岡山の女学校時代の社会主義との出会い、郷里出身の福田英子を頼っての上京にはじまり、治安維持法初の女性検挙者となり5年間の札幌刑務所での獄中生活、ゾルゲ事件に連座したため和歌山刑務所で過ごした敗戦後までの日々を追います。

九津見の人生を方向づけたのはカトリックとの出会いでした。「隣人を自分自身のように愛しなさい」が核になったと堀さんは書きます。やがて社会主義運動に飛び込んで行くのです。娘の一燈子も「無産者新聞」を街頭で売りました。

1925年、治安維持法が公布されます。三田村四郎の労働運動に共鳴し大阪から札幌に移住。1928年、初めての普通選挙が2月に行われました。しかし、政府は公然と選挙に干渉したのです。治安維持

法が成立し、九津見と14才の娘一燈子も検挙されました。一緒にはしてくれず別々でした。その拷問の様子に震えあがりました。ひどい拷問をされても、権力と対峙するときには余計なことはいっさいしゃべらない。彼女は「存じません」を貫きとおしたのです。

堀さんは治安維持法にある「茫漠性」が現在の共謀罪法にも繋がっているのではないかと思います。

九津見は幸い獄から出られましたが、ゾルゲは死刑に。小林多喜二は獄中で虐殺されました。

九津見は非転向を貫いた社会主義者でした。書物を残さず、2番目の夫が転向したことについても語っていないため、誤解もされたようですが、言い訳は一切しなかったとあります。「私は子どもを泣かせて来ましたがね。娑婆へ帰れましたら、こんどは子どもに孝行させてもらいます」と獄中で知り合った作家の山代巴に九津見は何度もそう言ったとあります。「汝の隣人を愛せ」という博愛的な優しさが、九津見房子を貫いて娘の大竹一燈子へと流れ、そして今、和子さんへと流れているのだと書く堀さんに、深く同意しました。人間として誠実に生き抜いた人生。その生き方は二人の娘にも伝わっています。

社会を変える生き方を選択した九津見房子の背筋がしゃんと伸びた生き方に感動しました。

自身の人生と台湾の民主化の歩みを辿る



わたしの青春、台湾

傅榆（フー・ユー）著
五月書房新社 1,980円

アジア初の同性婚法制化、蔡英文総統の歴史的再選、女性議員がアジアトップ水準の4割を占め、世界も注目した新型コロナ対策などで関心を集める台湾。

私が2回目の台湾に行ったのは2012年です。ハンセン病回復者の支援活動をしていて、取り壊し問題が起きていた台湾楽生療養院を仲間と訪ねました。支援の学生がたくさん集まっていて「No more fukusima」と書かれた布が壁にありました。「フクシマ、大変でしたね」と何人もの学生が声をかけてくれました。原発に反対する市民運動の力強さを実感しました。その後、脱原発に舵を切ったことは有名です。

映画「私たちの青春、台湾」は2014年に台湾で起きた学生たちによる社会運動「ひまわり運動」のリーダーと、中国人留学生の人気ブロガーの活動を通し、台湾民主化の歩みを記録したドキュメンタリーです。フー・ユー監督はこの作品で、2018年金馬獎と台北映画祭で最優秀ドキュメンタリー映画賞を受賞しました。金馬獎授賞式で監督が涙を流しながら、「私たちの国が真に独立した存在として見なされることを心から願っています。それが私の台湾人として最大の願いです」とスピーチをしたことは大きなニュースになり、SNSで拡散され、中国の人々からバッシングを受けました。

本書は台湾の民主化の歩みとフー・ユー自身の人生を振り返ります。

フー・ユーは華僑の両親を持ち台湾で生まれました。5歳の時に戒厳令が解除され、台湾は民主化へと動き出す。思春期を迎える頃、周囲は「中華民国防衛戦」の

スローガンが流行し、アイドルに夢中だった中学時代、台湾は史上初の総統直接選挙に熱狂していました。やがて彼女はドキュメンタリー映画と出会い、2014年「ひまわり運動」を撮り始めます。この運動でリーダーをしていた男子学生のウェイティンと中国からの留学生で台湾の様子をブログ発信していた女子学生のボーイーに興味を持ち、彼らなら何かを変えてくれるのでは、と期待したフー・ユーが2012年頃から2人を追いかけてきました。結果として、監督の思うような展開にはならなかったけれど、中国大陸、台湾に香港も含めた難しい問題に踏み込んでいるのは素晴らしい。最終的にきちんと満足できる仕上がりにするために思考を繰り返し、自己反省する姿に前を向く監督の誠実さが伝わってきました。

フー・ユーがこの映画を通して観客に伝えたかったのは「ひとりの人間として、情熱と衝動に満ちた青春とその後に来る幻滅や妥協、成長を経験しそれでも自分がより良い人間になろうとし続けることなのです」とあとがきに書きました。

台湾の複雑な歴史と民主主義の難しさを感じました。札幌では1週間の上映で見逃し、ネットで鑑賞。ラストでインターナショナルを歌うシーンには、挫折で終わった民主化に涙があふれました。

居場所のない人の物語



JR上野駅公園口

柳美里著 河出文庫 660円

福島県から出稼ぎで上京した主人公の男性がホームレスとなり自殺に追い込まれるまでを、戦後の日本社会のいびつさと関わって描いています。全米図書館賞受賞。

主人公は67歳から上野公園でホームレスとして暮らすカズさんです。1933年生まれ。高度成長期に福島県から出かせぎで上京。家族とは離れ離れで、暮らしを支えました。

妻と二人の子どもに恵まれますが、放射線技師になったばかりの一人息子は21歳で急死。そして連れ合いも亡くなります。再び上京。上野公園でホームレスになります。主人公の方言をまじえた回想を軸に、周囲のホームレスの生活と交友、行きかう人々の様子を会話を通してリアルに描いています。社会の片隅に追いやられたホームレスの悲しさが胸に迫りました。2014年の作品ですがまさにコロナ禍で仕事を失い、家族も失った人々と重なりました。

バブル崩壊後、上野公園はブルーシートを覆った段ボールやベニヤでつくった「コヤ」で埋め尽くされていた。その住人の多くが集団就職や出稼ぎで上京し、上野駅を基点に郷里と往復してきた経験を持つ東北出身者でした。

「山狩り」と言う言葉を初めて知りました。行幸啓直前に行われる「特別清掃」のことです。ホームレスの人々は通知があると、コヤを畳んで移動しなければなりません。上野公園内に500人ほどいたホームレスが、東京オリンピックの誘致活動が始まったのを機に一掃される様子も描いています。一番弱い人が切り捨てられるのは許せないと怒りがわきました。

大家族の四季を現代の山水絵巻のように描いた



春江水暖～しゅん
こうすいだん

ゲー・シャオガン
監督

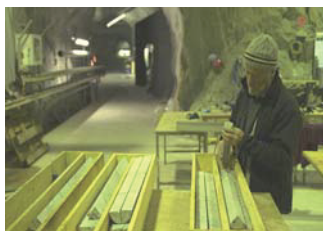
ゲー家の母の誕生会が長男ヨウフーの経営する料理店で開かれます。長男は借金で経営が行き詰まり、次男は漁師ですが、自宅は取り壊しが予定されていて、船上生活をしています。3男は妻と別れ、ダウン症の息子と暮らしていますが、博打に手を出し取りたてに追われています。4男は建設現場で働いていて独身。3世代にわたる大家族の群像劇です。

ゲー一族が暮らしているのは富陽。街の中を富春江がゆったりと流れています。

監督は再開発が進む自分の故郷の今を記録しようと山水画に想を得て、家族をモデルに撮影を始めます。描かれるのは変わりゆく世界に生きる大家族の四季です。市井の人々のリアルな息遣いを感じさせるのは、ほとんどが監督の親族や知人だからでしょうか。一番素敵だったのは長男夫婦の娘グーシーと恋人のジャンが富春江でデートの場面。「競争しないか？僕は泳いで君は歩く」と言って、ジャンは川を泳ぎ始めます。グーシーは川に沿って歩くのですが、カメラはずっと追い続けます。ジャンが水をかきわける音、鳥のさえずり、グーシーのハミング、川辺で語り合う人々の声。ゆったりと流れる大河が二人を祝福しているようでした。カメラは川の流れに同一化するように、横スクロールします。この10分間を超える切れ目のない連続がまさに山水画の中に私も入ったような気持ちになりました。

市井の人々の生活を長い絵巻物のように見せたいと考えた監督は、様々な行事や風習を丁寧に描いています。山水画や絵巻物を現代に再現し、雄大な自然を体現する音楽も素晴らしかった。

核のごみ捨て場はどこにもない



地球で最も安全な場所
を捜して

エドガー・ハーゲン
監督

核のごみは地球で最も毒

性が強く、10万年も閉じ込めておかなければなりません。

スイスのエドガー・ハーゲン監督が原発推進論者の核物理学者チャールズ・マッコンビーと地球で最も安全な場所を探した旅の記録です。この60年間で、高レベル核廃棄物35万トン以上が世界で蓄積されたという。それらの廃棄物は長期にわたって人間や環境に害を与えない安全な場所に保管する必要があります。しかし、そのような施設がまだ作られていないにも関わらず核廃棄物、いわゆる”核のごみ”は増え続けている。2人はアメリカ・ユッカマウンテン、イギリス・セラフィールド、中国・ゴビ砂漠、青森県六ヶ所村、スウェーデン、スイスなど世界各地の最終処分場候補地を巡ります。

科学者・専門家たちの理想とする提案に突きつけられる現実がありました。本作ではこれまで候補となった土地で起きた様々な状況をマッコンビーと世界を巡りながら目のあたりにします。

マッコンビーは平らで広い土地であるオーストラリアのオフィサー盆地に着目します。有数のウラン輸出国でも原発ゼロのオーストラリアでは説明会で地元住民は「自分たちの核ごみは自国で処分すべき」と反発し、計画は中止になりました。一方、アメリカのニューメキシコ州カールスバット元市長のボブ・フォレストが核ごみを受け入れ「私が好きなのは廃棄物じゃなく成功物語だ。1000人の雇用と2億3000万ドルの予算。高給で解雇もなし。これぞアメリカンドリームだ」という言葉に言葉を失いました。最終処分場に手を挙げた寿都町長、片岡春雄氏と重なりました。科学者の小野有五さんも痛烈に批判しています。アメリカの地質学者であり、実業家でもあるデビット・ベントは「処分場から100kmの範囲は5m以下の起伏でなくてはダメだ」と断言します。砂漠であり大平原はあるのか？

日本は地下水に恵まれ、世界で唯一、4つのプレートが境界にあり、地層処分は出来ません。日本にある原発は全て廃炉にすべきです。原発推進・反対派とも避けては通れないこの問題に正面から向き合う本作は、いままさに必見の作品です。

草原を渡る現代の風



羊飼いと風船

ペマ・ツェテン監督・
脚本

チベットの大草原。牧畜をしながら暮らす、祖父と若夫婦、3人の息子の三世代が、昔ながらの素朴で穏やかな暮らしを営んでいました。しかし、時代の風は草原にも吹き荒れ、牧畜を止めて街で働く人も多い。息子の学費をねん出するのも大変です。

少数民族は子ども3人までは許されています。4人目になると、高額な罰金を払わなくてはなりません。そんなある日、母ドルカルが妊娠が分かります。喜ぶ家族をよそに母の心は揺れ動きます。伝統的な信仰と、変わりゆく社会の狭間に立たされ、次第に家族とすれ違っていくのです。葛藤の末に母が選んだ道は……。母ドルカルを演じたソナム・ワンモ。複雑な心の揺れを見事に演じました。子どもたちは、演技経験はなく、天真爛漫で生き生きと躍動します。

ペマ・ツェテン監督は、今のチベットと人々の意識を掘り下げています。

厳しい土地で生きる人々のたくましさ、広大な自然を圧倒的な映像美で描きました。

空高く舞上がった赤い風船を、それぞれの場所から空を見上げるシーンに、家族の願いや希望がこめられているようでした。

山田洋次監督は「優しくして厳しくて神秘的で、そしてそこはかなくユーモラスな家族の姿を、遙か遠い国のチベットの監督が鮮やかに描いた」と評しています。

社会の光と影を映し出す

すばらしき世界

西川美和監督



西川美和監督はオリジナル脚本にこだわり続け、名作をたくさん作ってきましたが、今作は長編映画としては初めて手掛ける原作ものです。佐木隆

三が実在の人物をモデルにつづった小説「身分帳」が原案です。

人生の大半を裏社会と刑務所で過ごした男にとっては、現代ほど生きにくい世の中はありません。本編でも不寛容な社会が描かれており、正義感が強く直情的な主人公・三上(役所広司)は、いたるところで壁にぶち当たります。役所広司は喜怒哀楽を全身で表現して見事です。笑える場面もたくさんありました。

三上は強面で、カッと頭に血が上りやすい性格ですが、真っすぐなくらい優しく、困っている人を放っておけません。今度こそは真っ当な人生を生きたいと悪戦苦闘しています。彼を題材に、受刑者の経歴を詳しく記した身分帳を入手したテレビプロデューサーの吉澤(長澤まさみ)は制作会社を辞めたばかりの津乃田(仲野太賀)に取材を持ちかけます。三上は服役中にノートに自分の身分帳を書き写していたのです。彼の姿を面白おかしく番組にしようと思いますが、いつの間にか津乃田の人生を変えていきます。三上のなんとも愛すべき正直さや心優しさに触れた津乃田は取材者としてではなく、友人として接していきます。二人のやり取りを基調に描かれます。

生活保護を申請する我が身に不甲斐なさを感じ、めまいを起こして倒れてしまう…という描写もありました。チンピラに絡まれたサラリーマンを助けた後、津乃田との電話で「善良な市民がリンチにおうとつても見過ごすのがご立派な人生ですか!」と問いかけるのです。そんな世界で、主人公・三上の殺人犯という過去を知っていても手を差し伸べる人々。津野田、スーパーの店長(六角精児)、役所職員の井口(北村有起哉)、身元引き請け人になった弁護士の庄司夫婦(橋爪功と梶芽衣子)ら思ってくれる人々の存在がこの世の中にいるということ、三上は徐々に噛みしめていきます。大事なものは誰かとつながり社会から孤立しないこと。このことこそが、三上にとっての幸福といえるのではないのでしょうか。

三上が自分が育った施設で少年たちをサッカーに興じる場面。少年たちとのふれあいで無邪気な笑顔を見せますが、子どもを抱きしめてとめどもなく泣くシーン。私も涙が止まりませんでした。迎えに来てくれなかった母のこと。施設で育った子ども時代を思い出していたのでしょうか?

九州のやくざの親分のおかみさんが放ったひと言に唸りました。「あなたは、これが最後のチャンスでしょうが。娑婆は我慢の連続ですよ。我慢のわりにたいして面白うもなか。そやけど、空が広いち言いますよ」。ようやく見つけた介護施設でも、三上はとても許せない現場に遭遇します。自分を抑え、やり過ぎて生きることを選んだ苦渋の表情が忘れられません。うまく生きられない三上のほうがずっと人間的でないかと、心に

突き刺さりました。

爽やかな風に揺られる、秋桜が愛おしく思えました。「すばらしき世界」は広い空に描かれた文字。清濁入り混じった世界に差し込む慈愛の光でしょうか?今観るべき「すばらしき世界」心にしみました。音楽も良かったです。

通信へのメッセージありがとうございます



★いつもながらぐいぐい引き込まれてしまう、私にとってはとても大事な学びの通信です。(近美千代さん)

★厳しい冬の閉塞感のある今の希望を感じる写真です。春は来るよって。みな子さんの通信は希望です。日々めげそうになることも多いけれど、だからこそ勇気をいただいています。アウシュビッツの中谷さんの記事も懐かしく読ませていただき問いかけをもらいました。アウシュビッツに行ったときに学

高橋備さんのお便り んだ気持ちを忘れたくないです。またクッキングハウスでお会いできますように。(溝井留美さん)

★このたびは拙著の紹介ありがとうございました。あの名文を読んで購入される方多いと思います。同封の映画チケットはお礼です。(笑)私共の代わりに観てください(梅沢俊さん)

★心ときめく銀河通信楽しみにしています。(高嶋道さん)

★今泉みね子さんの寄稿で、ドイツの今の様子よくわかりました。アウシュビッツのガイドの中谷さんへのインタビューいい記事でしたね。みな子さんは行ったときに直にお話をお聞きしているんだね。青木さんの「時代の抵抗者たち」読んでみようと思います。今回は紹介している映画は観てないのばかりで残念。

★「アーニャはきっと来る」も「燃ゆる女の肖像」も観たかったなあ。「行き止まりの世界に生まれて」は津端の友人が観てきて詳しくスクリーンのない映画館してくれました。(水野スウさん)

★「私の映画評」を特に楽しみにしています。なかなか映画館には行けませんがこれを読むと俄然行きたくなくなってきます。報道番組の案内などの情報も嬉しいです。(鳥居明子さん)

★銀河通信最新号とても読みでががありました。映画館にほとんど行っていない者にとって たいへんありがたい内容でした。書評も素晴らしく 読んでみたくりました。(宮下嶺生さん)

★銀河通信は私たちクッキングハウスにとって大きな支えになっています。私の「ハンナのカバン」の文章に触れてくださり本当に嬉しく思っています。(井出歩さん)

★今回も読みごたえありました。学びたい欲求を満たしてくれて一気に読んでしまいます。まるで喉が乾いていたかのような心境で、本を読み、映画もみな子さんと観ているのです。そして世界が広がり、心が開いていきます。クッキングハウスのスタッフも読者になってくれたことも嬉しいです。(松浦幸子さん)

★サーモンブルー～アイヌ「先住権」を求めて～を制作した寺田です。樋口さんが読者の方々にティーパで視聴できるようにご紹介いただいたおかげで、いろいろな方が見ていただけさらに感想まで頂いています。ドイツの今泉さんの記事には僕のものらしいリアルな状況が書かれていて、本当に驚きました。コロナというのは厄介な存在ですね。(寺田和弘さん)

購読料と寄付をありがとうございます (敬称略) 2.8~3.10

藤田春美 高嶋 道 高橋 備 柴崎 徹 中村京子
小林嘉則 宮本紀子 久野真紀子 竹内修一 伊藤泰弘
森 隆子 但馬桂子 小林千賀子 合計48,500円は印刷代と送料に使わせて頂きます。書籍 ミツイパブリックから「わかな十五歳」寄贈

恐縮ですが2021年から購読料を2000円に値上げしました。今年度分の振込にご協力ください。Webに切り替える方はお知らせください。

郵便振替「銀河通信」02740-7-56535 お願いいたします。